大口町コミュニティバス参考資料

中部経済新聞　平成20年7月5日

大口町運行のコミュニティバス

割安感で通勤需要好調

企業向けPR奏功

ガソリン高騰も追い風

愛知県大口町が「町民の足」として運行しているコミュニティバスに、企業の利用が相次いでいる。愛知県や大口町の補助金があり、運賃は名古屋市内の民間バスに比べて約半額の一回一律百円と、割安感が好評の理由のようだ。大口町も企業の利用は採算性の向上に役立つとして歓迎している。（小牧）

大口町が運行するコミュニティバス

大口町のコミュニティバスは、朝夕の通勤通学バスと昼間の巡回バスの二種類で、いずれも四ルート。企業の利用が増えているのは通勤通学バスだ。

大口町が〇三年に運行を開始した時点では、町民が名鉄柏森駅や江南駅まで通勤通学のために行く時の利用を想定していた。朝は町内から駅、夕方は駅から町内へ行く運行の乗客が多くなる。

逆に朝は駅から町内、夕方は町内から駅へ行く運行の乗客は少ない。その乗客数を増やすため、町内の企業に社員の通勤時の利用を呼びかけた。

〇七年にはパロマ工業、日本紙工、東海鋳造所が利用を開始。今年二月からはリンナイ、さらに七月からは象印マホービン、シルビア、大和グラビヤが利用を始めた。企業は運賃とは別に、運行支援金として月額一万五千円から五万円を大口町に支払っている。

大口町によると、〇七年度のバスの運行経費は五千四百六十九万円。一方の収入は運賃で八百三十六万円、運行支援金などで二百二十三万円。愛知県からの補助三百四十一万円と大口町負担金四千六十八万円で収支を保っている。

大口町の担当者は大口町の負担金を抑制するために、今後も町内企業の利用拡大を呼びかけていく考え。ガソリン代の高騰からマイカーによる通勤を控える潮流もあり、町内企業の利用は今後も増えそうだ。